



総長予定者の宝金氏

公約実現に学内から期待

本学第20代総長の予定者が前北大病院長（2013～18年度）の宝金（ほうきん）清博特任教授に決まった。近く、文部科学相が任命し、正式に就任する。病院長時代の実績は折り紙付きで、学内からは公約の実現に期待する声が上がっている。



宝金清博氏

宝金氏は2日、総長選考会議（議長＝石山喬氏）が選出した。宝金氏のほか、笠原正典理事・副学長、横田篤教授が候補者だったが、同会議委員の投票で宝金氏が過半数票を集めたことが決め手となった。

もともと合議で決定する予定だったが、決めきれず投票に。会議は約4時間に及んだという。

同会議は構成員とのコミュニケーション能力や経営の提案力などを評価した。

宝金氏は「再生」と「発展」と題して、指定国立大学法人への申請や、不動産運用などによる経営力の強化

化といった政策を提案していた。国からの交付金のうち実績により配分される額が減ったことなど17年からの現執行部の課題を指摘。

「いまの国立大学は自分たちの力で稼ぐ方向にある」との認識を持ち「新しい方向に向かないといけない」との考えがある。

「ボトムアップ」

総長選で宝金氏の推薦者には医学研究院の多くの教員が名を連ねた。そのうちの一人で推薦者の代表（推薦人）を務めた白土（しら）博樹教授は「病院長時代に色々な価値観のある2500人をまとめ、（厚生労働相が承認する）『臨床研究中核病院』の認定に導いてくれた」と大鼓舞を押す。

北大でシカ目撃相次ぐ 珍しいメスの可能性も 専門家「きちんと対処を」

本学構内でシカが目撃が相次いでいる。9月まで3カ月連続で目撃情報があり、専門家は「情報収集の体制づくりなど大学全体できちんと対処した方が良い」と指摘する。



村橋さんが撮影した動画から

村橋究理基（くりき）さんによると、シカは周りの様子を伺っており、メイנסトリートも横断。村橋さんらを警戒している様子だった。ツノは確認できず体があり大きくなく見えたことから、「メスではないか」と思ったという。

8月は28日午前7時半～8時ごろ、北大病院付近でシカ1頭が出現。本学施設部や警察によると、病院の警備員が目撃しており、その後本学構内のメイנסトリートを南下して逃げた。本学では7月にもシカが目撃されているとの情報がある。シカなど野生動物の生態を研究している本学文学研究院の立澤史郎助教（保全生態学）は、「北大のように大都市にあつて山と繋がっていない大学で出現するのは珍しい」という。新型コロナウィルスの影響で構内に人がほとんどいないことも背景にあるだろうと推測する。

ただ、最近の出現事例はとくに注目するべきという。目撃されたシカがメスだった可能性があったため。立澤助教によると、今までの北大の徘徊事例はほとんどがオスシカだった。メスは警戒心が強く、よほどのことがなければ生息場所を移動しない。本日にメスであれば「今後そこで繁殖する可能性はゼロではない」（立澤助教）。

もともと、シカの性別を情報として記録するのは難しい。8月の事例では警察は「ツノがありオスだった」とする一方、立澤助教が大学本部に問い合わせたところ、「ツノはなかった」。オスとメス両方が構内にいた可能性もある。

立澤助教は、学内で出合ったシカに対しては「絶対にエサをやらす、近づいて脅かさず、無視するのが一番だ」と勧める。その上で、「情報収集の体制づくりや、事故防止などのマニュアル作成をする必要がある」という。

また、「迷惑だから出て行ってもらおうと考えるか、野生動物であるシカが気持ちよく過ごせるよう配慮するかでやるべきことは大きく変わる」とも指摘、「どちらの判断もありだ」とした上で「大切なのは①シカの徘徊理由やトラブルを避けるにはどうすれば良いか、北大の知恵と経験で明らかにする②北大とシカがどう付き合うのが良いのか、構成員などが情報を共有し議論する——ことだ」とした。

究などの中心的役割を担う病院を医療法上に位置付ける仕組み。論文の数や質などが要件として求められ「東京大や京都大のようにはない」（白土教授）と本学にはハードルが高いとの見方があったという。

しかし、宝金氏は「頑張れば良いことがある」などというように鼓舞し、構成員らのやる気を引き出した。「トップダウンではなくボトムアップで、低いハードルから盛り立てていた」と白土教授。要件に達し、18年3月に承認された。

指定国立に期待

宝金氏は2日の総長選考

ら看護師や事務職員などの現場の小さな問題にも目を光らせ「後回しにすることなく一つ一つの問題を解決しており見事だった」と白土教授は話す。

18年9月に胆振東部地震に見舞われた際も迅速かつ柔軟に対応し、道内医療の最後の砦（とりで）としての役割を果たしたという。

北大600位以内 世界の大学ランキング

英教育専門誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（THE）」が9月発表した最新の世界大学ランキングで、本学は501～600位にランクインした。前年の401～500位から下がった。1位は前年同様、

英オックスフォード大だった。情報学を学内には公開してほしい」と要望した。

一方、理系学部男性助教は「指定国立など大きな物事は説明や構成員の合意の上で進めてほしい」と注文をつけた。

会議に先立って行われた一定の役職以上の教職員らによる投票で、4割の票を集めていた。学内には公約実現への期待の声がある。

理系学部の男性教授は「公約通り指定国立に必ず採択されてほしい。旧帝国大学で申請できていないのは本学のみで『多くの優秀な教員が他大学に流出する恐れがある』との危機感がある。

世界の大学ランキングでも本学の順位が下がっており、「教育、研究で上位になれるような施策を打ってほしい」と期待した。

前総長の解任問題をめぐり宝金氏が何らかの検証をするとしたことについては「判断が正しかったのかど

うか新しい人たちで再評価し、情報を学内には公開してほしい」と要望した。

一方、理系学部の男性助教は「指定国立など大きな物事は説明や構成員の合意の上で進めてほしい」と注文をつけた。

英オックスフォード大だった。情報学を学内には公開してほしい」と要望した。

一方、理系学部男性助教は「指定国立など大きな物事は説明や構成員の合意の上で進めてほしい」と注文をつけた。

8月は7人感染 北大構成員 新型コロナ

本学は8月、学生や医師など計7人の新型コロナウィルス感染を発表した。

内訳は4日に学生1人、12日に学生4人、17日に学生1人、24日に北大病院の医師1人。

本学構成員の感染者は10人になった。9月は13日現在、発表されていない。

日本勢トップは東京大（36位）。日本勢のなかでは本学は11位タイで前年の8位タイより下がった。

北大の「今」を発信中！

ウェブサイト
(THE MAINSTREET)

Twitter
(@HokudaiShinBun)

THE MAINSTREET

Powered by 北海道大学新聞編集部

北大教員ら抗議声明

フェローの周庭氏逮捕に

香港民主派の中心メンバーだった周庭（アグネス・チョウ）氏が8月10日に現地警察に逮捕されたことを受け、同氏がフェロー（研究員）に就任している本学公共政策大学院の教授らがインターネット上で抗議声明を発信した。逮捕は不当だとして署名を呼びかけ、声明の発信から1カ月で署名者は1万人を超えた。

声明を出したのは本学公共政策大学院の遠藤乾教授や池（ち）直美専任講師など学内外の研究者ら。中国で6月末に制定された香港国家安全維持法により周氏らが逮捕されたことを受け、学外の研究者らとも協議の上で「何かしなければ」と発信を決めたという。

特設サイトなどに掲載された声明では、同氏らの逮捕について「不当な逮捕に抗議した上で（同氏らが）拷問を受けてはならない」と求めている。一方で「これらの要望は、特定の地域の混乱や分裂を求めているものではない」とし、同法の趣旨には反しないとも強調している。賛同者への署名呼びかけも同時に行い、声明の発信からおおよそ1カ月間で1万人を超える賛同が寄せられた。

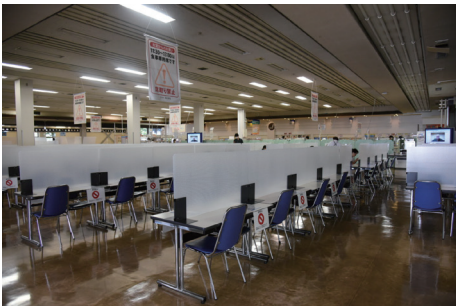
同大学院と周氏との関係は数年前から始まった。香港の民主化運動「雨傘運動」の学生らを本学に呼ぶなど東アジア情勢に関心のあった池講師らは、他大学の研究者からの紹介で同氏と知り合い、SNSを通じて交

また近年、本学や北海道教育大の教員らが中国当局によって拘束される事案も相次いでいる。池講師は「学問の自由が保障されておらず、（研究者らは）怖くて中国に行けない状態」だと指摘。交流が完全に止まることはなくとも、周囲の研究

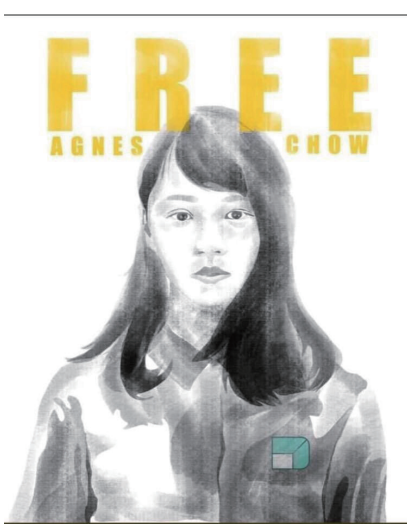
北大生協、客数6割減

8月、前年同月比

北大生協が新型コロナウイルスの影響に直面している。オンライン授業の導入などで学内人口が減少し、来店客数の落ち込みが続いているほか、旅行や懇親会の中止が響く。新型コロナウイルスの終息は見通せず、影響は長引きそうだ。



仕切りが全てのテーブルに設置され、席数も大幅に減少。コロナ下の食堂は感染対策で、以前の景色から遠い。北大生協によると、授業のオンライン化や、教職員の在宅勤務などで学内人口が落ち込み、店舗での売り上げが大きく減少している。8月の来店客数は前年同月比で約6割減。約8割減だった7月よりは改善したが、「オンライン授業が継続しているため状況の変化は



声明のウェブサイトには豪州の芸術家のイラストを採用した。URLは個別記事ページに。©Badiucao

者らの間では「中国には」当分行かない」とする声が多く聞かれるという。同講師らは日中間の学術交流が

十分にできないことに加え、日中関係、ひいては世界中の研究者にも影響が及ぶことを懸念している。

北大生協では営業赤字がここ数年続いている。同生協は今年度、学部ごとにアンケートを実施し、ニーズに合わせて事業や売り場を再編させる準備をする予定だった。

しかし、そこを新型コロナウイルスが直撃した。小助川専務理事は「新型コロナウイルスの影響で新たな経営難が発生し、アンケートなどは計画通りに進められていません」。

すでに明らかになっている新型コロナウイルスの経営への影響もある。今年2・5月期は卒業衣装や海外旅行などのキャンセル・返金対応の

キャンセル・返金対応のほか、食堂での懇親会の中止のみで売り上げ（供給）が約7000万円減っている。来学期以降については「新型コロナウイルスの終息見通しが立たない状況が続く、授業も対面、オンラインが併用、学内人口は元に戻らないと想定している」（小助川専務理事）という。

ニュースDIGEST

7/10 北大行動指針

レベル1へ引き下げ

本学は10日、「新型コロナウイルス感染拡大防止のための北海道大学の行動指針」（BCP）をレベル2から1に引き下げ、基本的行動を公表した。

レベル1は、通常を0としたBCPで一番制限が少ないレベル。研究活動は感染拡大に最大限配慮して可能となる。

7/13 北大に爆破予告

学生立ち入り禁止に

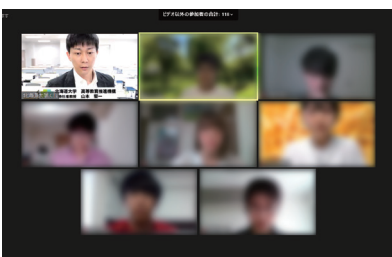
本学は13日、同日正午に建造物を爆破するとの予告が届いたと明らかにした。これを受け、同日は本学構内への学生の立ち入りを禁止するなどの措置をとったが、被害や異常などは確認されなかった。

7/16 オンライン授業

どう感じる？

セミナー開催

本学高等教育研修センターは16日、「学生はオンライン授業をどう受け止めているか」と題し、新入生を発表者としたオンラインセミナーを開催した。本セミナーは9日に続き



2回目。教育関係者向けに開催され、本学教職員のほか、学外の参加もあり120人弱が出席した。

7/30 来年度入試一般選抜

追試験実施へ

本学は30日、来年度の入学者選抜要項を公表した。新型コロナウイルスの対応として、一般選抜（旧一般入試）で追試験を実施するほか、発展的な内容を出題する際は設問で補足する。

追試験は前・後期とも対象で、3月22日に実施。新型コロナウイルス感染症に罹患またはその疑いがあった受験者のみが受けられる。

7/30 北大祭、開催断念

本学大学祭実行委員会が30日開いた会合で、北大祭を中止することを決めた。



6月の実施を見送り、秋開催やオンライン開催を検討していたが反対が賛成を上回った。

実行委は、北大祭の開催是非についてアンケート結果など本学学生の意見を踏まえ委員の多数決により決定するとしていた。会合での議論の結果、感染対策が難しいことなどから反対が4人と、賛成の2人を上回った。オンラインでの開催についても、「その場での体験に意味がある」などの意見が出て、反対が4人だった。

8/7 2学期授業

条件付きで対面

本学は7日、2学期の授業について、「3密」を回避し感染予防策を十分講じられるものは対面で行うと発表した。1年生などが受ける全学教育では同日、2学期の授業

の実施方法を明らかにしており、今後各学部なども対応を示すとみられる。本学はまた、課外活動の対応の更新も公表。本学が策定した課外活動についての指針に基づき活動計画を提出し、許可を受けた学生団体は▼屋内外の団体練習▼遠征の再開▼道内で開催される大会等への参加が認められる。

8/9 マラソンコース

実地検証行われる

東京五輪

延期された東京五輪のマラソン・競歩を1年後に控え、大会組織委員会は6・9日、札幌市で実地検証を行った。キャンパス内の約1キロがマラソンコースに含まれる本学でも大会組織委のほか、北海道や札幌市などの担当者らがコースを見て回った。



最終日の9日早朝、会場運営の班の9人が南門から本学構内に入り、コースに沿って建物や周辺環境などを確認した。

8/22 解任の名和氏

騒動後初、公の場に

本学総長を6月末に解任された名和豊春氏が22日、札幌市内で解任問題について講演し、手続きの問題点などを改めて主張した。解任騒動以降初めての公の場。会場のエルフラザ（同市北区）には本学教職員や学生、一般市民など83人が集まった。名和氏は講演後、今後の訴訟について「検討している」と話した。



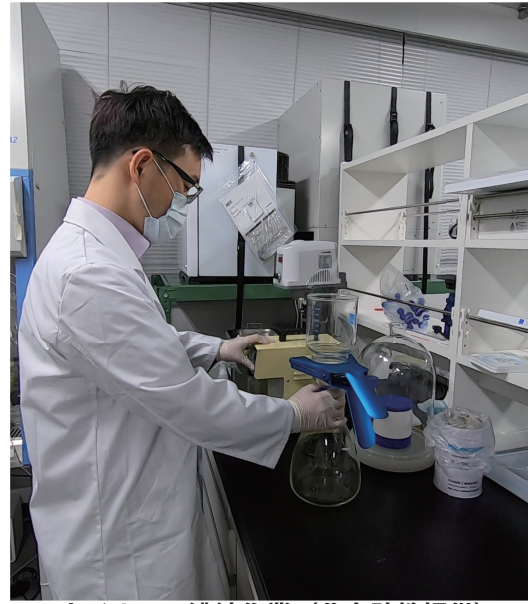
〈特集〉

北大の新型コロナウイルス研究

下水からコロナ流行の兆候をつかむ

工学研究院 北島正章助教

北島正章助教は、下水中の新型コロナウイルスを検査する手法とその活用について研究を行っている。北島助教の専門は環境ウイルス学で、下水などの水の中のウイルス、特にノロウイルスなどの腸管系ウイルスの検出や検出法、そしてそのデータから感染流行状況を推定することやウイルスのリスク評価を普段研究対象としている。



ウイルスの濃縮作業（北島助教提供）

こうした下水をモニタリングすることで特定の地域における疫学情報が得られるという「下水疫学」の観点から、新型コロナウイルスの流行状況を把握することなどを目的しており、感染拡大防止につながる可能性や、流行収束の判断材料としての活用が期待されている。

下水中の新型コロナウイルスについて調査を始めたのは3月初め。それ以前から新型コロナウイルスについては論文などで情報を得ていたが、最初は呼吸器系のウイルスであることから下水疫学的なアプローチができるかと思っていなかったという。

こうした下水をモニタリングすることで特定の地域における疫学情報が得られるという「下水疫学」の観点から、新型コロナウイルスの流行状況を把握することなどを目的しており、感染拡大防止につながる可能性や、流行収束の判断材料としての活用が期待されている。

下水中の新型コロナウイルスについて調査を始めたのは3月初め。それ以前から新型コロナウイルスについては論文などで情報を得ていたが、最初は呼吸器系のウイルスであることから下水疫学的なアプローチができるかと思っていなかったという。

「下水疫学から感染制御に貢献できる可能性があるのではないか」。そう判断し研究が始まった。同助教の国際共同研究グループは4月末に下水中の新型コロナウイルスに関する総説論文を世界で初めて発表し、その後も検査手法の確立につながる研究成果をあげてきた。

北島助教は研究のステップとして、①下水からウイルスが検出される理由、感染者のうち糞便から検出される人の割合について文献調査を行う、②様々な自治体に協力してもらいサンプルを採集する、③ウイルスの検出法を開発・確立する、④実際に検出作業を行う（実測）、⑤検査手法の一般化などを行

い、企業や自治体でも検査が行えるようにしてリアルタイムでモニタリングできるようにする（社会実装）の5つを考えているという。現在、遠くは福岡市など全国の自治体から送られてくるサンプルをいくつかの検出法を用いて検査しており、検出法の開発と実測を同時に進めている。

下水疫学調査はすでにノロウイルスやポリオウイルスで活用され、流行状況の把握や流行収束の判断のために用いられてきた実績があるが、「簡単に新型コロナウイルスに当てはめられるものではない」と同助教は話す。

新型コロナウイルスの調査が難しいのは今まで扱ってきたウイルスと構境が異なるほか、

タリングして流行状況を把握できるようにすること。もう一つは国際線の航空機の下水を検査することだ。機内のどれくらいの人感染しているか、どの国・地域から持ち込まれたかなどについて推定できるようにする。さらに、PCR検査だけでなく、センサーを

使ったリアルタイムのウイルスの検出なども視野に入れている。

同助教は新型コロナウイルスで下水疫学のアプローチが確立され社会実装が進めば、「将来新たなパンデミックが起きた際に、すぐに新しいウイルスに対応できるように」と話し、研究・検査

唾液によるPCR検査を可能に

医学研究院 豊嶋崇徳教授

豊嶋崇徳教授は、新型コロナウイルス感染の有無を確かめるPCR検査について、唾液による検査が従来指定されていた鼻咽頭のぬぐい液（スワブ）による検査と同等の精度を持つことを確かめ、認可につなげた。唾液による検査では、スワブ採取に伴う医療従事者への感染リスクが無くなる。

検査が可能ではないかと考え始めたのは4月に来院したある患者のPCR検査を行ったときのことだ。当時はスワブと喀痰（かくたん）両方の検査が必要だったが、提出された検体について検査技師からは「どうみても痰ではなくつばだった」という報告を受けた。しかし、

実際の検査を行うと、スワブでは陰性だったが、唾液で陽性反応が出たという。

4月25日、唾液とスワブの感度を比較する研究を開始し、76例における診断一致率が97・4%という結果が出た。そして6月2日、唾液による検査の認可に至った。

唾液による検査では、検査を受ける人自身が唾液をカップに吐き出すことで検体採取を行う。そのため、鼻に綿棒を入

採取方法

①口のなかに自然にたまる唾液をカップに吐き出す

②これを2回行ってください

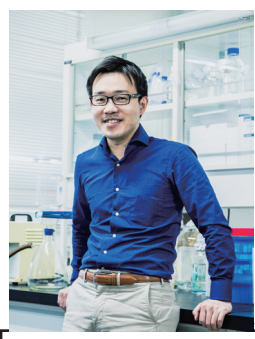
③容器のふたをしっかりと閉めてください

唾液の採取方法（豊嶋教授提供）

76例における診断一致率が97・4%という結果が出た。そして6月2日、唾液による検査の認可に至った。



てしま・たかのり
本学大学院医学研究院内科学講座教授。1986年九州大学医学部卒業。2012年より現職。18年より北海道大学病院検査・輸血部部長兼任。唾液を用いたPCR検査方法の開発により、20年度第3回伊藤太郎特別賞受賞。



きたじま・まさあき
本学大学院工学研究院助教。専門は環境ウイルス学・都市衛生工学。2011年に博士号（東京大学）取得。米アリゾナ大学博士研究員、シンガポールMIT・アライアンス・フォー・リサーチ・アンド・テクノロジー博士研究員を経て、16年から現職。